第２次福岡市立高等学校活性化検討委員会（第２次会議）第３回会議議事録

１　開催日時　平成２２年２月２４（水）１８：００～２０：００

２　場　　所　福岡市役所１１階教育委員会議室

３　議　　題　（１）福岡女子高校の活性化について
　　（２）福岡西陵高校の活性化について

４　出席委員　進藤委員、中村委員、是永委員、武石委員、葛城委員、宮﨑委員、清水委員　（順不同）

５　傍聴者数　９名

６　議事概要

（１）福岡女子高校の活性化について、事務局より資料に基づき説明があった。

（委　員）説明のあった４つの視点に沿って、意見を交換していきたい。先ず、資料に関して質問はないか。

（委　員）ライフデザイン科の一般コースとはどのようなものか。

（事務局）家庭科の学習である衣食住や保育などについて広く学ぶコースである。

（委　員）調理師資格について法改正の動きはあるのか。

（事務局）関連する部分においてはない。

（委　員）職員アンケートの普通科の課題の中に「方向性が不明確」とあるが、不明確・不明瞭なのは教員にとってか生徒にとってか。

（事務局）普通科に関わる教員が、例えば指導内容のレベルなどについて共通認識が不十分であり、指導の方向性が不明確になっている。

（委　員）生徒や保護者は、女子校であることを理由に学校を選んでいるのか。把握できているか。

（事務局）平成18年の６月に行ったアンケートでは、志望理由を複数回答で尋ねたところ、「女子生徒のみの学校であるから」という理由を上げている生徒は３割程度であった。その他では、「学校の雰囲気がよく楽しい学校生活をおくれそうだから」が５割程度、「卒業後の進路や目標がかなえられそうだから」が２割程度あった。その後の調査は行っていない。

（委　員）平成１８年度の議論では、存廃や共学化の是非が議題として取り上げられた。その後も調査を行うべきであった。現在の状況がわからない。生徒や保護者の希望に応えるべきだ。女子校に行きたいという希望があるなら、女子校をなくすことはでき

ない。

（委　員）「女子高校として女子教育の推進を図っていく」ことについて、平成18年度の検討委員会では、共学化を図ることと両論に分かれたが、皆様のご意見をいただきたい。

（委　員）学校自己評価を見ると、生徒・教員の評価が高くなっている。学校の雰囲気も良くなり、教員の学校改善への意識が高くなってきていると感じる。この方向で頑張って欲しい。

（委　員）保護者としては、女子校に対する安心感があるのではないか。家庭を支えるという女子教育が基盤となっているが、女子校が存続するためには、これからの評価が大切である。

（委　員）共学化については、生徒や保護者へのアンケートを継続してとり分析する必要がある。当面、女子校として継続するとしても、今後とも共学化は議論の対象となる。女子教育でいくとすれば、その特色を発揮するための手立てについても意見をいただきたい

（委　員）全ての学校を共学しなければならないということではない。福岡女子高校における伝統としての女子教育も時代とともに変わってきているのではないか。

（委　員）福岡女子校の通学区域はどうなっているのか。

（事務局）家庭科と国際教養科は県内全域であり、普通科は福岡市全域と糸島市からの通学が可能である。

（委　員）時代が変わっても必要なことと流行とを融合した家庭科教育を実施する必要がある。他の一般の高校にはないもの、例えば、国際人としてのマナー教育や長期間のインターンシップなどは学校の特色となる。

（委　員）普通科の一般コースの中に家庭科的なものを盛り込んではどうか。

（事務局）普通科の特色として家庭科の内容を取り入れたコースを持つ学校は全国的にある。選択科目の中に家庭科の科目を取り入れている。

（委　員）女性として求められる資質の向上のため、学校のベースとして共通に学ぶべきものを確立してはどうか。女子校として進むのであれば、福岡女子校のどの学科であろうが共通に学ぶべきものを示す必要がある。

（委　員）各学科・コースで特色ある女子教育が行われており、あえて女性はこうあるべきだというような共通な教育を行う必要はないと思う。

（委　員）女性としての生き方などについて共通に学んでいいと思う。

（委　員）新学習指導要領には、高校においても、道徳を教育課程に明確に位置づけることが示されている。女子教育についてもその一部として教育課程に位置づけて実施す

ることができる。

（委　員）私しとしては女子教育というものが整理できていない。女子だから、男子だからではなく、人間としてというふうに置き換えられると思う。女子教育イコール家庭科には疑問がある。

（委　員）学科の特色を生かした校外活動は教育効果があり、教育課程に位置づけるなど発展させる必要がある。

（委　員）次に、国際教養科を普通科のコースとして再編することについて議論したい。志願倍率が低くなっているが、どのように分析しているのか。

（事務局）国際教養科に対するニーズが少ない。卒業後の進路が印象として文系に固定されていることなどから、国際教養科より普通科を選ぶ者が多い。

(委　員) 志願者が少ないから再編を行うというのではなく、国際化に対応するという国際教養科を設置する意義はあるのだから、中学生にアピールするのが先ではないか。

（委　員）中学生には、この早い段階で、国際教養科に進むという決断ができないのではないか。

（事務局）国際教養科の志願倍率は低迷が続いており、学校でも活性化の取り組みや中学生への広報に取り組んできた。英語科・英語コースについては、福岡女子高校だけの問題ではなく、県下でも志願者が少なくなり、学科・コースの募集停止がなされ、当初からすると半減している状況がある。入学してくる生徒は目的意識も高く卒業後の進路実績などもあるので、それを普通科の中のコースとして生かしていきたいと考えている。

（委　員）国際教養科は必要であるから設置されたはずである。必要であるなら就職などの進路がはっきりと示されるべきだ。生徒に分かるように説明されていたのだろうか。

（委　員）国際化という流れに乗って設置されたが、志願倍率が低下しているのは、国際教養科の魅力が見えないからであろう。卒業後の進路に結びつくような取り組みは魅力になるであろう。

（委　員）国際教養科には、設置された当時、普通科より成績のいい生徒が集まるというようなイメージを持った生徒が多いと思う。しかし、生徒の伸びが見えないことから、志願倍率が低迷しているのではないか。普通科のコースとして再編することは妥当であると思う。

（委　員）設置当初と比べて、国際教養科の生徒の状況は変わっているのか。

（事務局）志願倍率の低下に伴い、平均的なレベルの低下はある。

（委　員）普通科の中に、進学に特化したコースを導入することについて意見をお願いしたい。

（委　員）特別な進学コースについては、いきなり設置するのは難しい。実績のないままで設置しても信頼が得られない。普通科の中で生徒を育てていき実績を積み上げてから、次の段階で設置するのが適当ではないか。

（委　員）普通科にコースを導入し、多様な進路希望に対応するということだが、特別な進学コースの目指すところは何か。

（事務局）国際教養科の生徒は能力もあり進学実績も残している。この国際教養科が積み重ねてきたものは引き継ぎたいと考え、普通科の中に国際コースと特別な進学コースを取り入れた。実績がないと信頼を得られないというのは確かであるから、先ずは、これまで合格者の少なかった大学にも一般入試による合格を目指すなど、中学生や保護者の期待に応えつつ実績を積み上げていくことが大事であると考えている。

（委　員）進学実績を上げるためには、授業時間の確保や課外補習などの取り組みが必要になるが、対応できるのか。

（事務局）授業時間については、どのような教育課程を編成するかということであり問題はない。課外補習については、現在でも進学補習などに取り組んでおり、対応は可能である。

（委　員）実績が出てくると、それが後輩達への励みにもなる。コースの目指すところを、当初、どこに置くか、工夫が必要である。

（委　員）福岡女子高校の残りの議論については、次回継続して行うことにして、残りの時
間は、福岡西陵高校について意見交換をしたい。

（２）福岡女子高校の活性化について、事務局より資料に基づき説明があった。

（委　員）説明のあった２つの視点に沿って、意見を交換していきたい。先ず、「生徒の進路希望を実現させるための、普通科のあり方」として、「特別進学コースの設置について」ご意見をいただきたい。

（委　員）国公立大学の合格状況はどうなっているか。

（事務局）平成１９年度の卒業者については、大学への進学者が１６１名、その内１８名が国公立大学である。平成２０年度の卒業者については、大学への進学者が１８０名、その内２１名が国公立大学である。

（委　員）落ち着いた雰囲気の中で、部活動や勉強に頑張っているようすを見学した。進路希望を実現させようと頑張っている生徒を鍛えるため、特別な進学コースを設置する必要性を感じる。

（委　員）優秀な人材を育てるという意味では、管弦楽部のような全国レベルの活動も行われている。

（委　員）管弦楽部の活動で得られた自信などについて、他への波及効果はあるのか。

（事務局）福岡西陵高校の部活動加入率は７０％を越えており波及効果のひとつであり、活動実績での相乗効果もある。部活動生徒としての連帯感も感じる。

（委　員）管弦楽部は小・中学校や地域への貢献として校外での演奏活動を行っているが、他にも同様な取り組みを行う部活動が出てきた。高校生にとっても、外に出て活動することで自信を持てるようになった。部活動と勉強の両立を目指しており、いわゆる部活動組、進学組というような分け方はしていない。

（委　員）管弦楽部も最初から今のようなレベルにあったわけではなく、地道な取り組みや努力がなされたものと思う。これを進学実績の向上に置き換えることはできないだろうか。

（委　員）進学コースの編成と併せて、進学指導体制も整えてもらいたい。

（委　員）課外補習体制を整えるために、教員の勤務時間等の弾力的な運用ができればよい。